

うちの
みんなで
読んでね

今年もお盆のシーズンを迎えました。テレビには帰省ラッシュや御墓参りなど各地の光景が風物詩として映し出されます。皆さんもお寺に参拝したり、お盆のお参りを依頼されたり、あるいは行楽に出かけたりとそれぞれに予定を立てておられることでしょう。そこで浄土真宗の門徒として、お盆の迎え方について考えてみましょう。

仏教あるいはお寺というと、亡くなった方を供養するというイメージが一般には強いようです。私たちの浄土真宗は、「念仏成仏これ真宗」と言われるように、今を生きるこの私が、仏法を聞くことによって救われ、お念仏を喜ぶ身となり、この世の縁が尽きるとき直ちに浄土に往生し、仏となる教えです。

浄土真宗を開かれた親鸞聖人は、「親鸞は亡き父母の追善供養のために念仏したことは一度もありません。というのも、命あるものは全て皆これまで何度となく生まれ変わり死に変わりしてきた中で、父母であり兄弟姉妹でもあったのです。どの人も皆救われなければならないのです」と仰られました。

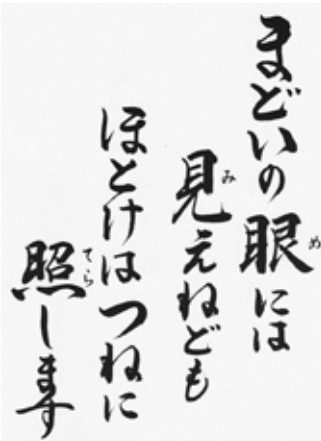
ちょっと意外に思われるかもしれませんが、これこそ仏教によって知らされる世界、念仏によって開かれる宗教観を簡潔に述べられたお言葉と言えましょう。自分だけの殻に閉じこもることなく、命あるもの全てを救うという仏の願いを通して、自分とあらゆるものの命を見、自らと全ての命の救いを見ておられるのです。

「空」「無我」と言う煩惱の断ち切られた世界は、私たちと無縁の世界ではありません。悟りの世界である浄土から、自己中心的な私たちを救おうと働きかけておられるのが阿弥陀様であり、その仏の呼び声が「南無阿弥陀仏」のお念仏なのです。

ですから浄土真宗において、お盆の法要は先祖供養というより、有縁の亡き方を偲びつつ、この「南無阿弥陀仏」の呼び声をお讃えすると同時に、仏法をお聞かせ頂く場なのです。(孝雄 出典 仏教家庭学校)



七月二十二日夕方、武生市街の寺院で解剖学者・東大名誉教授の養老孟司先生と宗教者が語る会が開かれた。一般の方も交え、約七〇名、夕食を挟んでのお話会。ブータン王国には二〇年来交流がある先生は仏教にも精通され、生と死にまつわるお話や、都市化と自然、人間の意識、美人と平均化、幸福論など、常識の枠を揺るがすトークが展開された。しかし暑かった。



◆この和讃の前半は「本願力にあひぬれば むなくすぐるひとぞなき」です。「本願力にあう」とありますが、浄土真宗の教えに生きるものは、往生して初めて阿弥陀様に遇わせていただくのではありません。お念仏して、喚び声を聞かせていただいている

るその時、実は大悲の阿弥陀様と遇わせていただいているのです。これを、「聞遇(もんぐう)」と言って大切にしてきました。そうやって遇つていく者は、その出遇いが決して意味のない虚しいものに終わるということはありません。

海には、どんな川も拒絶されることなく入つていき、澄んだ川も澱んだ川も不思議と同じ塩味に調つていきます。同じようにどれだけ煩惱に心濁らせ人生を歩んできた者であっても、この救いの法は決して拒絶することなく受け入れてくださいます。そしてその広大なおはたらきによって、濁った心そのままに、功德の宝海ともいべき仏心が満ちわたっていくのです。

子供が生まれれば、どの子の目もそれこそ川の源流のような澄み切った目をしています。しかし、成長するにつれ、徐々に人生の厳しさを知らされ、どうしようもなく目を濁らせ生きてゆかねばならない時が来るでしょう。しかしどんな人生が展開されようとも、親鸞聖人が明らかにされたご法義に出遇い、自分の人生に訪れた様々なことの意味をたずねていってほしいものです。その時、濁りの中にも仏心が満ちわたることでしょう。(引用「心に響くことば」)

教えて、お坊さん ⑪ 「お盆ってなあに? / 子供との対話」

子供「ねえ、お盆ってなあに？」

住職「昔インドで、目蓮尊者というお釈迦様のお弟子さんが、亡くなったお母さんを餓鬼道から救ったというお話からきているとされるものだよ。それでこのお盆の時期には、亡くなった方がこの世に帰ってくるとも言われるね」

子供「キュウリやナスがお供えされて提灯が飾られるのはどうして？」

住職「キュウリは馬でナスは牛というように、亡くなった人が帰ってくる人の乗り物で、提灯は迷子にならない目印のつもりのようだね」



子供「お葬式の時にはお棺を回したり、お茶碗を割ったりお塩をまいたりしたでしょ。死んだ人を嫌ったりしているみたいで不思議..。それに帰ってくるとか迷子とか、亡くなくてもまだ生きています人みたい」

住職「それは昔から亡き人を偲ぶということの現し方だったのかもしれないね。でも浄土真宗では亡くなった方がお盆の時期に来たり帰ったりするとは言わないんだよ」

子供「ふ～ん、なんで？」

住職「阿弥陀様という仏様のおはたらきによって、亡くなった方はすぐに仏様となっているんだよ。そしていつも私たちをずっと離れることなく、良い子でいられるよう働いてくださる。もしかして迷子になつてるのは人間のほうかもしれないからね」

子供「じゃあ、浄土真宗のお盆ってなんなの？」

住職「浄土真宗のお盆は歓喜会（かんぎえ）とも言って、よろこぶという意味がある。ところで、よろこぶってというのはどんな時？」

子供「それは、誰かから、何かしてもらって、嬉しい時かな」

住職「そうだね。先にお盆を歓喜会と言ったけれど、阿弥陀様という仏様の救いがプレゼントされて、それがよろこびだから歓喜会なんだ。だから阿弥陀様にはお願いするのではなく、『ありがとうございます』と感謝してお礼を言うのがお盆のお参りなんだよ」

子供「ということは、亡くなった人は関係ないの？」

住職「いやいや、その亡くなった人たちも、阿弥陀様にお礼をしながら人生を送ってきたのだから、今、阿弥陀様がおられるお浄土と一緒に私たちを見守っていてくださってるんだよ。お盆だけ来て終わったらすぐ帰ってしまうんじゃないで、どんな時でも私たち一人一人を決して見放さない。亡くなった人を思い出しながら、阿弥陀様という仏様の心を感じ取れるように、お盆のお参りをしようね」（参考「仏教家庭学校」）



* 孟蘭盆経という経典では、餓鬼道に堕ちた苦しみから救うには、当時夏季修行期間中だった多くの修行者たちに、修行が開ける日にご馳走を用意して祝いをしなさいと釈尊が助言します。修行を成就しおもてなしをされた修行者たちの喜びが、餓鬼道にも伝わって、お母さんたちが救われたというのです。

仏教の世界観・六道輪廻の一つである餓鬼の世界は、飢えや渇きに代表される際限のない欲望がいつまでも満たされないという苦しみです。その欲も苦しみもしかし自覚がありません。振り回され、迷いの中に入っています。そこに気づいてくれよと、六道を解脱した悟りの世界から呼びかけられている。その呼び主を仏様として私たちは頼みとするのです。どのように人生を迷い、どのように閉じようとも関係なく救われている、そのように私たちを目覚めさせようと働きかける存在。私たちは人生のどこかでそのような出遇いに恵まれたとき、最大限に満たされるのではと思います。

実践!

肩の荷がおりの気功⑥ ～ふりこ（スワイショウ）

腕の力が抜けたまま、ぶらんぶらんと振り子のように腕が前後に揺れます。肘を軽く曲げれば、動きが大きくリズムカルになり、肩や背中もゆるんでいきます。急に止めずに、だんだん小さくなって惰性で止まります。

呼吸も頭も静かにして、時間もペースも自由。長く続けるほど、繰り返し運動で脳が気功状態に入りやすくなります。肩周りもほぐれ、呼吸器系が調います。捻り（泌尿器系）のパターンもあります。by NPO 法人気功協会



「大人の修学旅行 in ヒロシマ」

◆6月下旬、二泊三日で主人と旅行に出かけました。旅行というより修学旅行というのがぴったりの二人旅。行き先は広島です。主人が丹生組内で戦争と平和について講話したことで、これを機にまだ行ったことがない原爆資料館を訪ねたいと行き先が決まりました。

実は広島は、私が4年間学生生活を送った町です。4年間住んでいたにもかかわらず原爆資料館は一度も足が向きませんでした。なんだか怖くて、そして辛い気持ちになるのがわかっていたからです。大学を終え実家に戻る前日に、やはりこれではいけないと資料館に入ったという情けない思い出が蘇ります。

それで今回の旅では、2日目に丸一日平和記念公園と資料館をめぐることにしました。公園はボランティアガイドの方に案内してもらい、100m 道路「平和大通り」の成り立ちや、在日韓国人の慰霊碑、被爆アオギリのエピソードなど、一つ一つ熱心に教えていただきました。

◆特に私の心に残ったのは、韓国人原爆犠牲者慰霊碑です。労働力を補うために動員された朝鮮半島出身者は、当時約10万人でそのうち2-3万人が原爆の犠牲になったそうです。日本の戦争に巻き込まれ、祖国を離れ原爆で亡くなった韓国人の方がこんなにもいるのかと驚きました（全体の1割）。慰霊碑台座の亀は韓国の方角を向いています。こんな悲惨なことを、私は今まで全く知らなかったのです。

その後は資料館に入り、今度は一つ一つゆっくり、自分の中に残るように展示物や解説を見ていきました。在学中には知ろうとしなかったことを少し恥じながら、平和記念公園を後にしました。



↑リニューアルされた東館。デジタル映像技術がリアルで見やすく。語り部さんのお話やビデオ上映会も。外国人多数！



↑在日韓国人慰霊碑、1970年建立。毎年8/5に慰霊祭が挙行される。



↑被爆アオギリの木。爆心地から1.3kmで幹半分焼けただけが奇跡的に翌年芽吹き、多くの人々に勇気を与えた。

*広島平和記念公園内及び周辺に50数箇所にもものぼる慰霊碑や記念碑、施設があるとは驚きだった。原爆という生き地獄を経験してきた街が、ここにその追悼と供養、惨禍を集め、英知を凝らして伝え続けようとしている気迫が、訪れる者に静かに迫ってくる。(S)



↑ 2歳で被爆、白血病で折鶴を折り続けながら12歳で亡くなった佐々木禎子さんがモデルの像。各地からの折鶴がぎっしりと。



↑原爆供養塔。身元不明の遺骨約7万柱が納骨。様々な宗派教団が追悼法要を捧げる。



↑国立追悼記念館（地下）。地上に8時15分を模した時計、周囲に水と被曝瓦を配置。

→世界遺産の原爆ドーム、近づく
と補強はされているが生々しい。



→慰霊碑の向こうに池と両手のひらを模した平和の灯、原爆ドームが一直線。背後の高床式の資料館、大通りからも見える設計。



↑核兵器と戦争のない世界を願う平和の鐘。描かれた地図に国境はない。周囲の池の蓮は、当時火傷を負った人が痛みをしのいだという。

◆ 3日目は軍港の街・呉（映画「この世界の片隅に」の舞台）に行き、海から半分だけ顔を出した初めて見る潜水艦群に、なんだか不気味な恐さを感じました。退役した潜水艦が博物館になっています。今回は戦争の恐さ悲惨さを改めて実感し、自分の戦争に対する態度について考えさせられた旅となりました。

そしてもうひとつ、世界遺産や観光地あまり興味がない主人は、宮島・厳島神社に行くのに気乗りしなかったようですが、いざ行くとあの大きな大鳥居や移動の船の中で思いの外はしゃいでいたので、これも新たな発見でした。(C)



